

◆ 上島 新たな社会の仕組みづくりを構築できるかどうか、その自治体の明暗を大きく分けていくと私は考えます。

そこで、今回は大学と学生は我が区にとって資源となり得るかどうか、区の姿勢についてお聞きいたします。

現在、世田谷区には大学と短期大学を合わせて二十校、総合大学のほか農業、工業、体育などさまざまな分野を有し、その他専門学校も十五校あり、文化学園都市としての資質を十分に持っております。在学生の総数は八万六千五百二十五人、実際に区内に住民登録をしている学生は約五万人、実際の在住はそれをはるかに上回ると予想されます。

さて、区民にとってこの学生についてさまざまな感想を持っていると思いますが、やはり学生のマナーの悪さを快く思っていないというのが一番多いのではないかと思います。私自身、大学や専門学校のある町に住んでおりますが、ごみの始末の悪さ、たばこの投げ捨て、夜中の大声や、自転車やバイクの無謀な運転、違法駐車など、程度はさまざまですが、目に余るものもたびたび見聞きいたします。これらの問題を一面的な方法で解決することは難しいと思いますが、区として住みよいまちづくりを目指している以上、避けて通ることができない課題の一つです。

しかし、もっと問題は、学生という存在を自治体の潜在能力として全く活用していないということと私は考えます。世田谷区に在住する大学生は、ずっと世田谷区に住み続けるわけではありませんが、いつも十万人弱の学生が在住するという、その区内の力をそのままほうっておいてよいとは私は思いません。大学や学生は区にとって重要な資源であるとは私は考えますが、その辺はいかがでしょうか。区のお考えをまず最初にお聞きいたします。

実際、個々のレベルでは、学生が世田谷区民にとってすばらしい活動をし、すばらしい関係を築いている事例を聞くことがあります。世田谷区としても、以前より学長懇談会を持ち、また、最近では産学公の連携という事業を持って、大学との連携、連絡を進めているところです。しかし、その中身は不十分であり、また、学生まで届いていないように思われます。まず産学公の連携については、ここに来て力を入れ始めた事業ですが、当区の場合、第一義的には共同して製品開発を行うという目的であって、コミュニティー育成そのものを目的としていないというふうに理解しております。

そこで確認としてお聞きいたしますが、産学公の連携の基本的目的、そして現状の実績についてお示しをいただきたいと思えます。

一方、学長懇談会ですが、これは三年に一度しかないとはいえ、ある程度定着している感がございます。しかし、生涯学習の充実を図るという視点で教育委員会が担当しているのであれば、安直過ぎると言わざるを得ません。区としてもっと広い目的で大学との連携に臨むべきと考えます。

そこでお聞きいたしますが、もともと政策経営がやっていた学長懇談会が、現在は教育委員会が担当しているという、その理由と目的についてお教えてください。

また、あわせて現在の学長懇談会を通じ、教育施策では一歩進んだ連携がとれているように思えます。担当所管としての評価、また大学側の反応、そして今後の課題や見通しについていかにお考えかをお伺いいたします。

私は、教育委員会が窓口として大学と接することは、同じ教育関係ということで一定程度の効果があるのではないかと思います。やはり大学と全体的な施策の中で連携、活用していくには、冒頭に申し上げたように、地域的、個別的な問題に対処する目的も含め、総合支所を大学との基本的な窓口とし、通常から連携、連絡を深めるべきと考えますが、その辺についての区のお考

えをお聞かせいただきたいと思います。

今、大学改革の柱としてどこの大学でも地域と連携し、地域に親しまれる大学づくりに力を入れている傾向があります。実際、大学間の競争にもなっているように思います。また、学校以外に目的ややりがいを探している学生も多くいるようにも思います。こういった機をしっかりとらえて、しっかり対応できるかどうか、大学と学生を極端に有する我が区の将来を大きく左右すると言っても過言ではないと思います。このような要請に対し、大学にとっても、学生にとっても有効な提案をできるか、実際に円滑に運営できるかどうか重要であり、しっかりと取り組んでいかなければなりません。

その前提として、区として大学と学生とどのように連携していくべきか、もう一度整理する。もっと言えば、重要な資源としてとらえ、どう活用していくのか、まずは戦略を確立すべきと考えます。具体的な活動を言えば、大学も学生も災害時には大きな力になるろうかと思われませんが、日ごろからの防災対策の計画や訓練などへの主体的な参加や、小中学校のクラブ活動や土日活動への協力、高齢者福祉や障害者福祉におけるお手伝い、また、自分の住む地域の活動への参加、その他の分野においてもいろいろ考えられるのではないのでしょうか。そのためにも、全体的な取りまとめができる所管、もしくは関係所管から構成されるチームをもとに、ぜひさまざまな計画案をつくり、全庁的な取り組みをお願いしたいと思います。

そして、ここで特に申し上げたいのは、現在は大学を通じてですが、やはり住民としての学生と区が直接連携していく土壌をつくるべきということです。どのような方法が考えられるかですが、一つは、クラブやサークルと直接連絡をし、呼びかけをし、その活動の一端に区との共同活動を組み入れてもらうことも考えられますし、また、転入の際に大家さんなどの協力を得て世田谷区学生登録を推奨し、学生一人一人にメールなどでさまざまな区の取り組みへの参加協力を呼びかけることのできる仕組みをつくることも有効だと思います。また、既に実施している大学もありますが、大学の単位の中に区の関係の活動を入れてもらうことも有効だと思います。

あともう一つ、極端な案ですが、区内には広い家に住む高齢者の方が多いと思われませんが、大学と区や社会福祉協議会などが仲介し、そして何らかの助成をし、生活の厳しい学生に安い家賃で同居してもらい、身の回りのお世話などをしながら学校に通えるような制度をつくり、その高齢者の福祉、そして学生の貴重な経験、そして送りする親の負担の軽減を目的にした、まさに都市の総合的な政策があってもよいのではないかと私は思います。これは私の考えですが、担当所管ならではの現実に活用できる方法は幾らでもあるのではないかと思います。

いずれにしても、大学や学生が区や地域と連携を深め、自然にこの世田谷区の中で調和していくように進めていくべきであります。その方向で、今改めて大学、学生との連携の計画方針を総合的に検討し確立すべきと考えますが、区の今後の方針をお聞きいたしまして、壇上からの質問といたします。

◎ 世田谷総合支所長 大学、学生が地域の重要な資源であるという観点、それから総合支所が大学との窓口になるべきだという観点についてご答弁申し上げます。

お話にありましたように、大学や大学生の活力を生かすことは大切なことであると認識しております。区内には短期大学を含め二十二の大学があり、それぞれの大学と連携し、協力を得ながら、さまざまな事業を推進しているところでございます。次代を担う大学生が社会の一員として区や地域のさまざまな活動に参加、参画することは、学生本人はもとより、区や地域にとって大変有意義なものと考えております。

一方、改めていただかなければならない点もございます。お話のように、多くの学生のうちの一部とは思いますが、例えばたばこや空き缶のポイ捨て、放置自転車、あるいはごみ出しなどについては、

周辺の住民の皆様からも苦情をいただいております。このような場合には、区は学生が通学している大学へ直接出向いて申し出をし、学生に通じるよう指導していただくなど、協力要請を行ってまいりました。また、この申し入れに対して、大学でも協力的に対応していただいております。その結果、世田谷地域におきましては、駒沢大学、東京農業大学の学生に放置自転車のクリーンキャンペーンへの参加といった成果も生まれております。また、ごみ出しの悪さについては、清掃事務所の協力を得ながら、下宿先の家主さんや不動産屋さんの協力を得て改善を図っております。

区といたしましては、今後とも大学との連携を密に図り、問題解決をしていきたいと考えております。

世田谷区と大学及び大学生との連携の状況は、さまざまな所管が事業を通じ十六の大学にかかわっていただいております。少子化で若者が減っている現状がある中で、貴重な社会資源としての若い大学生のパワーを地域のまちづくりに役立てていきたい、そのように考えております。

まちづくりを推進する上では、地域と大学と区の連携が必要でございます。各地域におきましては、防災訓練や放置自転車クリーンキャンペーン等を実施する際には、大学生に参加していただいたり、大学の協力を得て、校庭や施設を利用させていただいております。こうした取り組みは、参加している大学生にも、自分たちの町を自分たちでつくっていくことに貢献している、そういった意識、充実感が大学生の姿からもうかがうことができます。特に防災につきましては、今後、各大学と防災協力協定を結んでいきたい、そのようにも考えております。

特に出張所では、地域住民とともに、常日ごろ積極的に大学との連携を進めており、地域住民との交流の場を設けて、コミュニティーづくりに向かって努力しております。総合支所といたしましては、大学も地域の住民の一人である、学生はその家族である、そういった位置づけのもとに、今後とも積極的に大学との連携を図り、大学生の若いパワーを活用し、支所と出張所が一体となって地域まちづくりを推進してまいりたい、このように考えております。

以上でございます。

◎ 産業振興部長 産学公の連携につきましてお答えを申し上げます。

産学公連携につきましては、区内産業の振興のために区内の産業と区内の大学とが連携をしまして、技術相談ですとか、人的交流を通して、技術指導、技術、製品の共同研究開発、学生のインターンシップなどを行うものというふうを考えております。現在、区内では武蔵工業大学と工業団体による技術相談会の開催など、産学の交流が深められております。

こうした状況を踏まえまして、今年度からは産学公連携の対象を拡大いたしまして、より多くの方々が参加できるよう、商業や工業、農業の全産業分野を対象にし、また、区民やNPO団体、そして大学生も参加し、区内の産業の活性化のための意見や提案、相談ができる仕組み、いわゆる産学公連携ネットワークのようなものを検討しているところでございます。

今後、このような仕組みづくりも含めまして、区内の産業を地域社会全体で支え、盛り上げていくような機運づくりを進めまして、区内産業の一層の振興を図ってまいりたい、このように考えております。

以上でございます。

◎ 教育政策担当部長 学長懇につきまして二点お尋ねがございました。

まず、学長懇を教育委員会が所管している理由と目的は何かということでございますけれども、学長懇につきましては、当初は区長部局が所管しておりましたが、第一回の懇談会におきまして、公開講座の開設など生涯学習に関するご意見を数多くいただいたため、第二回以降は、この生涯学習にかかわる課題への対応を中心に図っていくことといたしまして、区長部局と連携を図りな

がら、教育委員会事務局が所管しております。

次に、区内大学との連携施策についての評価と大学側の反応、今後の見通しについてでございますが、ことし二月に開催いたしました学長懇以降、幾つかの大学から具体的なお話をいただき、七月に日本大学文理学部において小中学生を対象とする科学実験フェアを、八月には武蔵工業大学において科学体験教室、さらには東京農業大学において環境教育に関する教員の研修、十月の体育の日には日本体育大学において親子で体を動かす実技を行う公開講座、十一月には産能短期大学においてアルピニスト野口健さんによる環境問題の講演会を実施いたしました。

参加した子どもたちや保護者からは、もっと専門的な分野も見せてほしいなどの反省すべき感想もいただきましたけれども、小学校の授業では学べない体験ができてよかったなどの積極的な評価もいただきました。また、大学側からは、この種の取り組みが広く社会から期待されていることが肌で感じられたなどの評価をいただき、来年はもっと規模を拡大して実施したいとの力強いお話もいただいております。

今年度実施いたしましたそれぞれの施策事業を検証し、課題等を整理しながら、大学や学生にとっても、また子どもたちや保護者、地域の方々にとりましても意義ある取り組みとなるよう、今後も継続して取り組んでまいりたいというふうに考えております。

以上です。

◎ 政策経営部長 今後の区の方針ということでご答弁をさせていただきます。

大学との連携の重要性に関しましては、区長が早くから発案をされまして、いわゆる当時企画部と言っておりました時代には、私ども現在の政策経営部が担当させていただいておりました。その後、ただいま申し上げておりますような経緯の中で今日に至っておりますが、議員ご提案のとおり、これまでの成果を未来につないでいくためには、今日、改めて大学、学生との連携を、より一層強く強いのものとしていく取り組みが求められているものと考えております。

来年度には新たな基本計画の策定作業に入る手順を想定しておりますが、その際、世田谷区の中長期の展望、区におきます戦略的な政策課題と政策方針など、議会のご意見、ご提案等をいただきながら、総合的に検討していく必要がございます。ご提案の点も重要な課題といたしまして、その中で検討させていただきます。

以上です。

◆ 上島 それぞれご答弁をいただきました。大まかに現在の大学と、また学生との連携というのは、教育と産業振興だけのように思われます。所管としてそれなりに連携していることはわかりますし、また、それは大変なご努力もあったと思います。しかしながら、どうも社交の域といえますか、イベントの域から出ていないと思うんです。やはりもっと学生を含めた区としてのコミュニティー像というものをしっかり持って取り組んでいっていただきたいと思います。

昨日、区長は豊かな地域社会の創造ということを目指しているということを申しておりましたが、やはりそういうこと、大学とか学生も含めたコミュニティーのあり方も考えていかなければ、当然そういう創造なんていうことは私は無理だと思っております。

また、小中学校の教育だけではなくて、広い意味での次の世代をはぐくむまちづくりといえますか、そういう世田谷の教育というものを実現していただきたいと思うんです。

私は学生はあくまで勉強すべきだと思いますが、今、日本においては机で勉強することだけでは立派な社会人にはなれないと私は思います。やはり教育という視点で、学生にもそういう協力をしてもらい、また、社会に生きる一員としてやるべきことをやってもらうことが重要だと思うんです。学生の活用という言い方をしましたが、結局は学生にとっても大きなプラスになることだと思いますし、

そういった事業を、これから社会を背負う若い人たちのために世田谷区が提供すべきだというふうに思います。

また、学長懇も必要だと思いますが、ぜひ大学へさまざまな計画をこちらから持って行って、プレゼンテーションを行って、一方的な提案にとどまらず、向こう側の意見を聞きながらやっていていただきたいと思いますが、最後に、助役のお考えをお聞きして、質問を終わりたいと思います。

◎ 水間助役 ご答弁いたします。

お話のように、区内の大学、それから大学生は、区が行政を進める上については大変重要なパートナーだ、このように思っております。また、大学側におきましても、地域に貢献したい、こういう意欲は大変ございます。したがって、今後、お互いに、今お話もございましたように、かけ声だけではなくて具体的な対策を検討していく、こういうことが最も重要であろう、このように思います。今後、区側といたしましても、総合的対応、そしてこれを推進していくという立場からは、窓口の一本化ということは、これはぜひ図りたいというふうに思っております。私個人としては、生活文化部あたりにとりあえず置きまして、その中で、総合支所、それから教育委員会、こういったところとの一体的な強化を図っていく、このことが一番よろしいんじゃないかな、このように思っておりますので、大学との連携を今後とも深めていきたい、このように思っております。